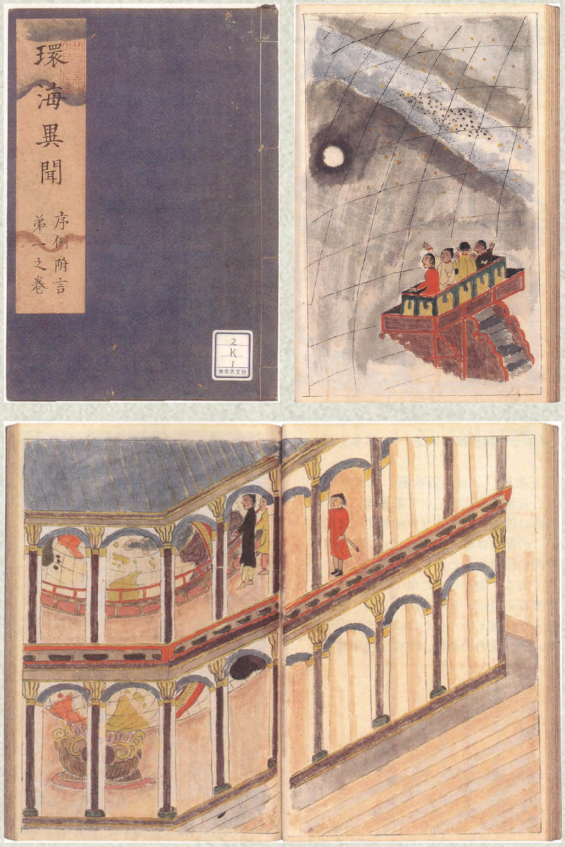
仙台とプラネタリウムの繋がり

～日本で初めてプラネタリウムを見たのは仙台の人だった！～

仙台とプラネタリウムの最初の結びつきは、江戸時代にさかのぼります。

寛政５年（1793 年）、仙台領宮城郡寒風沢（現在：塩釜市）出身の水夫・津太夫ら 16 名を乗せた船「若宮丸」は、米と木材を積みこみ、江戸に向けて石巻港を出港しました。しかし、思いがけない嵐に見舞われ、航路は大きく狂うこととなります。

何ヶ月も海を漂流し、ロシア領アリューシャン列島のある島に流れ着きました。その後、８年以上の年月をかけ首都サンクト＝ペテルブルクに到着した彼らは、当時の皇帝アレクサンドル１世に謁見し、日本への送還が叶いました。彼らのおよそ 11 年に及ぶ壮大な旅路の記録は『環海異聞』として今も記録が残されています。
『環海異聞』の中には、日本人で初めて星空を再現した装置・プラネタリウムを見た際の様子も記されています。



環海異聞　©NAOJ

彼らが見たのは、「ゴットルプの天球儀」と呼ばれるものだと考えられています。直径４メートルほどの大きな天球儀の中に入り、星のある場所にあけられた小さな穴から漏れてくる光を星に見立てて眺めるものでした。
一度に眺めることができる人数は 10 人ほどです。天球そのものが回転することで星空の動きをも再現することができます。

ゴットルプの天球儀（ロシア・ロマノスク博物館所蔵）
内側には当時の星座絵が描かれている。